

# 東日本大震災の復興事業の現状について

宮城県仙台市 上下水道部門

今道 洋 (Hiroshi Imamichi)

所属 株式会社 復建技術コンサルタント

## 1. 発災

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分太平洋三陸沖を震源として、M9.0 の大地震が発生した。巨大津波によって死者は 15,000 人を超え、現在も行方不明者が 2,000 人以上となっている。私は当時、大阪府枚方市の職員として上下水道局 2 階で勤務していた。震災直後、フロアにいるすべての職員の手が止まり、皆が互いの目を確認しあい、同時に建物の異様な長周期な横揺れに行動を停止した。インターネット配信により、映画と想像するくらいの津波被害の状況が次々に流され、その被害の甚大さを各々が確認した。

枚方市庁内では、年度末の退職者への慰労会や、年度初めの新入職員歓迎会等の全てをキャンセルし、被災地、被災者への追悼を心から念じていた。また義援金は庁内のあらゆる諸団体から集められ、当時の福祉総務課へ現金で納められた。枚方市の職員の中には東北地方に親族を持つ者は少なかったが、阪神大震災の支援や救援を心から感謝した経験をもつ職員が大勢在職中であり、その恩返しの気持ちもあったのであろうと思う。

## 2. 大阪での心境の変化

私自身、小学生入学間近の娘がおり新聞報道等で同年代くらいの子供たちが亡くなっている現実を、何度も説明した。今、普通に学校へ行けること、普通に食事ができること、普通に笑顔でいられることが本当に幸せであることを伝えた。

その後、勤務先では「全国都道府県における災害時の広域応援に関する協定」に基づき、人的支援要請があった(表 1)。同協定は、災害時の協力体制について全国自治体をブロック分けし、効率的な支援活動を実施するためのもので今回は応援ブロック第三順位として近畿ブロックは該当する。

私は在職 7 年、民間経験時代を含めると、社会人として、また土木技術者として 10 年というキャリアを社会貢献への一途として活用すべく名乗りを上げた。派遣前研修では、先遣隊の報告や心構え等を受講した。発表者に対する講演後の拍手は控えるよう伝えられ、発表者の疲労感の表れを見ると、被災地の悲惨さが感じ取れるようであった。

表 1 被災地応援ブロック一覧

		応援ブロック						
		順位	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
被災 ブ ロ ッ ク	北海道 東北		関東	中部	近畿	中国	四国	九州
	関東		北海道 東北	中部	近畿	中国	四国	九州
	中部		近畿	関東	北海道 東北	中国	四国	九州
	近畿		中部	中国	四国	関東	九州	北海道 東北
	中国		四国	九州	近畿	中部	関東	北海道 東北
	四国		中国	九州	近畿	中部	関東	北海道 東北
	九州		中国	四国	近畿	中部	関東	北海道 東北

しかし、派遣命令が下されないまま 1 年が過ぎようとしている現実には、被災地への意識は徐々に高まり、被災地を訪れることを決断し、平成 23 年度末に役場を退職。現在、宮城県仙台市の本社に勤務している。本社では、技術士である下水道の経験と、市役所での経験を活かせる計画部に配属され、被災地の復興に関わる基本構想、基本設計等に携わっている。

## 3. 復興事業の現状

当社は宮城県仙台市に本社を置くこともあり、復興関連事業の業務に携わることが多い。ここでは、私が実際に担当した業務について業務概要や感じた感想等について紹介させていただく。

## (1) 牡鹿郡 女川町

(死者：575人、行方不明者：340人)※1)

本町は宮城県でも有数の水産業の町であり、水産業が町の経済基盤を支えている。また、人口は約10,000人(H22)の小さな町で、女川原子力発電所を有することでも有名な町である。

震災時の津波の高さは12mにも達したといわれており、写真が示すように中心市街地において、甚大な被害を受け、空いた民有地には膨大ながれきが積み重ねられている状況であった。女川原子力発電所への影響が皆無であったことが、不幸中の幸いであったと私自身は感じた。



写真1 女川町女川河岸（がれきの積み重ねられた状況）

私はまず、災害危険区域の設定に関する業務に携わり、建築基準法上の規制区域の検討を実施した。区域の線引きの根拠については、被害状況、罹災証明、そして津波シミュレーションである。災害危険区域は、その区域内外によって土地、建物の位置付けや、国の支援事業の適用可否などが変わるため、非常にデリケートな作業である。実際、検討中には発注者との協議は、昼夜を問わず実施され、協議途中でも住民からの情報提供、苦情等により、何度も修正を重ね決定するものであった。

復興事業の計画業務は、非常に多岐にわたる。

次に私は、住民個別面談の技術専門員の業務に携わる。被災時に居住していた全ての住民、全ての土地所有者を対象に「個別カルテ」を作成する業務である。

個別カルテには、被災時・現在の家族構成、土地所有状況、移転希望先、町政への要望等、様々

な個人データを一から作り上げる作業である。この個別カルテの意向により、今後のまちづくり計画に活かすという重要な書類となる。

住民の人々に対し目隠しブースを設営し、面談員がカルテを作成するが、中には、事業のスケジュール、地盤の嵩上げ高、計画道路の概要など、技術的な質疑も非常に多く、私たち技術スタッフがどうしても必要であった。面談員、技術員の全スタッフが長期間にわたり、個人情報を取り扱う心労は、計り知れないものであった。

## (2) 気仙沼市

(死者：1,032人、行方不明者：324人)※1)

本市も女川町同様、宮城県で有数の水産業の町であり、人口は約74,000人(H22)である。サンマの漁獲量は全国で女川町に次ぐといわれ、ヨシキリザメのひれである「フカヒレ」は、気仙沼を代表する全国ブランドとして有名である。

被災時は沿岸部の町を津波が押し寄せ、1千人以上の死者を出すという大惨事であった。また、写真に示す第18共徳丸の打ち上げは、多くの人の記憶に今でも残っているのではないだろうか。現在でも、災害遺構の保存については賛否両論のなか議論が行われている。



写真2 津波による第18共徳丸の打ち上げ

私が本市で携わった業務は、気仙沼向洋高校の移転に関する基本構想、基本設計業務である。当校は校舎4階まで到達した津波によって、甚大な被害を受けたが、幸い生徒、教員による日頃の防災教育のおかげで死者はでなかった。現在は、同県の別高校のグラウンドに仮設校舎を建設し授業を実施している。



写真 3 気仙沼向洋高校（校舎）



写真 4 気仙沼向洋高校（実習棟）

基本構想の検討にあたり、当校特有の矛盾が生じた。当校が、水産高校であるということである。

水産高校は、地元の基幹産業である水産業を担う人材を教育する場であり、通常授業に加え、実習授業が欠かせない。実習授業は、当然、港を利用するため、近接する立地条件が求められる。本業務では、当校の特徴を活かしつつ、防災安全上の機能を有する候補地選定という点において、非常に難しい業務であった。

### (3) 岩手県

(死者：4,671人、行方不明者：1,249人)※1)

被災地の復興事業とは異なり、今後のエネルギー政策に向けた事業も、今後の防災関連における主要業務である。

私は岩手県において「自立分散型エネルギー供給体制を持つ防災拠点」の整備構想に携わった。

東日本大震災における、大規模かつ長期間にわたる停電や燃料不足の発生、また福島第一原子力発電所の事故等により、今後のエネルギー政策に

おいて、再生可能エネルギーの重要性が非常に認識されている。このような社会的背景を踏まえ、災害時も一定のエネルギーを賄える自立・分散型のエネルギー供給体制を持つ防災拠点の構築を目的とし、調査研究を実施するものであった。

まず、調査対象地区の地域特性、産業特性を調査し、再生可能エネルギーの賦存量を捉え、町役場や医療施設が集約された防災拠点となり得る地区に必要な熱電エネルギーを算出する。

その後、地域特性に応じた再生可能エネルギー施設（太陽光、風力、バイオマス、蓄電池等）の配置計画をケーススタディにより実施し、調査地区にとって最適となる将来構想を構築するというものである。



図 1 自立分散型の防災拠点構想(案)

土木技術者にとって、電気技術、機械技術等は専門外である。しかし、今後の防災という観点からは、あらゆる技術者と互いに連携、協議を重ね防災技術の向上を目指すべきであると考えます。

## 4. 復興事業に必要なもの(私見)

私が業務を通じて感じた復興事業に必要なものは、2つある。「スピード」と「住民との合意形成」である。

しかし、これらの事項はいわゆるトレードオフの関係であり、一方を追求すれば他方を犠牲にせざるを得ないという状態・関係である。

被災者の多くは、未だ仮設住宅生活を余儀なくされており、不自由な生活が2年以上続いている。この状況を解消すべく行政、民間企業、NPO、ボランティアなど非常に多くの人々が復興作業に従事しているが、確かに目に見える進展は遅いように感じる人も多いと思う。しかし、今後の住民の

生活を考えれば、住民意向を無視した国の主導的な事業は行うことはできない。

非常に難しい問題であると、私は感じている。

現在、世の中の報道においては、復興事業の遅れを指摘する声も多数聞こえてくる。しかし、私は現場で業務にあたる技術者として、「少しながらも、目に見える部分は少なくとも、着実に復興は進んでいる」と伝えたい。

## 5. 希望にあふれる東北

津波の傷跡が多く残る東北地方であるが、色々な地区で復興への活力と、現地の希望にあふれる気持ちを感じることができる場所がある。

「復興商店街」である。

わたしは、業務で打合せや現場調査へ行くたび、当地の活力に触れたく、その場で食することが多い。もし、何らかの機会にはいろいろな東北の味を味わって、現地の復興へのエネルギーを感じていただくことをお勧めしたい。

私のいち押しを、下記に紹介させていただく。あくまで私見である。

### ➤ 女川町～金華楼

「味噌ラーメン」が絶品である。通常の味噌ラーメンにとろみを加え、さらに唐辛子が入っており、絶妙なバランスである。毎度、最後の一滴までスープを食することができる。なお、一般的な名物は、実は「うにラーメン」である。



写真 5 金華楼 (PR ティッシュ)

### ➤ 女川町～おかせい

「海鮮丼」が一押しである。値段の割に海の幸がふんだんに盛り付けられ、加えて新鮮であり当然、美味である。非常にお得である一品。



写真 6 海鮮丼 (おかせい)

### ➤ 気仙沼市～フカヒレ

どこにでも大抵売っているが、作り方が簡単で非常にコクのある味わいである。どこの店か残念ながら忘れてしまったが、「気仙沼復興屋台村」で購入が可能である。



写真 7 復興屋台村気仙沼横丁

## 6. おわりに

復興事業は、まだまだこれからである。しかし現在も、「非常に多くの人が、未だ不自由な生活をしていること」、「非常に多くの人が、復興へ注力していること」、そして「東北の復興は、少しずつではあるが着実に進んでいること」を伝えたい。

最後に、私の我儘な意思により多大な迷惑をかけた枚方市に、心よりお詫び申し上げたい。そして、現在も協力を惜しまず仕事に注力させてくれている家族に、心より感謝したいと思う。

※1) 2012 (平成 24) 年 3 月 13 日正午現在(総務省消防庁 災害対策本部 2012 年 3 月 19 日)